初等教育教員養成のピアノ指導についての研究

——アンサンブル力を育てる指導——

梁島章子・山崎和子*・坂井康子*・松井明恵*

A Study of Piano Teaching for Students in Teacher Training Courses of Elementary Education

— Teaching to Develop Skills for Ensemble —

Takako YANASHIMA, Kazuko YAMAZAKI, Yasuko SAKAI and Akie MATSUI

Received October 3, 1995

抄　録：　本研究は，京都教育大学幼稚園教員養成課程で行われた授業「器楽演習」の実践を基にしたものである。先の『初等教員養成のピアノ指導についての研究（1）および（2）』では，その目的と学生の実態に合わせた指導の目標・内容・方法などから，初等教育教員養成におけるピアノや電子オルガンの「基礎的奏法」および教材曲を奏する「応用的奏法」の指導のあり方を論じたが，今回は，個人的に行われてきたピアノや電子オルガンなどの鍵盤楽器の実践体験を，教師に必要なアンサンブル力として育て上げる指導法について検討してきた。その結果として，「アンサンブル力を育てる指導」についての四つの段階的ステップ，すなわち，「アンサンブルへの導入」「アンサンブルの学習」「アンサンブルでの応用」および「アンサンブルの編曲」の内容について論じた。

索引語：　鍵盤楽器の指導，アンサンブル力の育成，初等教育教員養成

Abstract：　This study is based on seminars about musical instrument playing which were held at Kyoto University of Education during teacher training courses for elementary education.

Our two previous studies discussed teaching methods for students who were learning basic and applied rendition using pianos and electric organs.

This newest study focuses on teaching methods to develop skills for ensemble which are

* 本学非常勤講師

necessary for music teaching.

The study discusses ① introduction to ensemble, ② learning ensemble, ③ application of ensemble and ④ arrangement for ensemble.

Key Words : teaching how to play keyboard, development of skills for ensemble, teacher training of elementary education

はじめに

先の『初等教員養成のピアノ指導についての研究』（以下『研究（1）』[1]）では，京都教育大学幼稚園教員養成課程（以下，本学幼教課程）で行っているピアノ指導（「器楽Ⅰ」と「器楽Ⅱ」[2]）の実際を基にして，その目的と学生の実態に合わせた指導の目標・内容・方法等から，初等教育教員養成におけるピアノ指導（「音楽科」教員のための専門教育以外の鍵盤楽器の指導）の一つのあり方について論じた。

その後，免許法の改訂，教育実習時期の変更などに伴ない，大学のカリキュラムが改訂されたことで，授業の時期や内容を変更する必要に迫られ，ピアノ指導についても変更の必要が生じ，その実践を基にして，『初等教員養成のピアノ指導についての研究（2）』（以下『研究（2）』[3]）で，『研究（1）』で検討された「基礎指導についての再検討」とともに，その際の課題であった「応用力を養う指導」について論じた。

この研究結果によって実践を続ける中で生じた課題は，個人的に行われてきたピアノや電子オルガンなどの鍵盤楽器の実践体験を，教師に必要な歌唱・器楽の伴奏や指導のできる力および表現力にどう育て上げるかということであった。ここでは，教師に求められるこうした力を養う一つの方法として，アンサンブル力を育てることを試みた。

本研究は，授業「器楽演習」[4]で試みた実践を基に，「アンサンブル力を育てる指導」について論じたものである[5]。

Ⅰ．「器楽演習」についての概要

1．「器楽演習」の設定理由

本学幼教課程では，免許法やカリキュラムの改訂，教育実習時期の変更，非常勤講師枠の削減などの問題を解決しながら，ピアノ指導に関しては，「器楽Ⅰ」と「器楽Ⅱ」の授業名で，第1学年から2年間にわたり，先に『研究（1）』および『研究（2）』で論じた方法により，指導してきた。この授業では，鍵盤楽器奏法の経験者・未経験者にかかわらず，初等教育教員として要求される技術を養うことが目的であり，一部に連弾・歌唱教材伴奏などの体験時間が組み込まれてはいるものの，学生個々の過去の経験やその結果としての能力に合わせた学習活動が中心に行われてきた。

カリキュラム改訂以前には，こうした2年間の個人の経験に応じた学習活動によって基本的な技術をマスターしたものとして，第3学年に通年の授業として設定されていた幼稚園教育のための教材研究である保育内容の研究で，個人的な学習では体験できない，実践に役立つ力を養うためのアンサンブルの学習を組み込んできたが，種々の改定後は，こうした通年の授業を半年の授

業に変更せざるを得なくなった。また，時を同じくして，教育実習時期が第4学年から第3学年の，それも前期に変更されたことも関係して，教育実習実践に向けての学習の準備が充分にできないことが問題点として指摘されるようになった。

こうした事情の中で，教師として要求される，個人中心の学習では体験できない学習，すなわち，アンサンブルの学習は，実習が終わってからの第3学年後期から第4学年にかけてのカリキュラムの中に組み込んできたが，理想としては，第2学年までの学習が終わった段階に設置したいものと考えていた。

そこで，1993年度および1994年度に，臨時ではあるが，非常勤講師の追加配当が認められたのを機会に，「器楽演習」（集中講義）を設定し，これまでの課題を解決するための講義を行った。

2．「器楽演習」の目標

本演習は，1項でも述べたように，「器楽Ⅰ」と「器楽Ⅱ」を通じて，個人的学習として進められてきた鍵盤楽器の基本的な技能を基にして，アンサンブルの力を養うことを目的としている。この体験では，学生の表現力を高めることと同時に，後の幼稚園や小学校の現場での指導法研究の実際にも役立つことがねらいとされている。

本演習の具体的な目的や教材，指導法については，Ⅱ章で詳しく述べるが，実践にあたっての授業の主な目標は次の三点にまとめられる。

目標1　学生が個人的学習によってマスターした鍵盤楽器奏法の技術を活かし，アンサンブル学習を行うことによって，経験や能力の差に関係なく，演奏力や表現力を高める。

目標2　(i) アンサンブルのための楽器は，メロディーパートとして「器楽Ⅰ」「器楽Ⅱ」で学習したピアノや電子オルガンに，アコーディオンを加えた鍵盤楽器を中心として，他に木琴や鉄琴などの旋律打楽器を用い，また，リズムパートとして，数種の打楽器も加え，楽器の組み合わせの工夫も学ぶ。

(ii) アンサンブルのための教材曲としては，学習経験や能力の差が学習活動に影響を与えないような，すでに本学の音楽関係の授業で学習したピアノや電子オルガン，歌唱などの教材（以下，既習教材）や比較的読譜に時間を要しない，学生たちがよく知っているポピュラーな曲から選曲する。

目標3　アンサンブルの内容・方法としては，全楽器を交代で体験できるようにし，履修者が多い場合には，小編成のグループ活動も行う。「器楽Ⅰ・Ⅱ」で学習した旋律奏を中心に，他の音楽関係の授業で学習した対旋律やハーモニー，リズム，楽曲の構造などに関する知識も応用できるように導く。さらに，指定された内容のみの演奏ばかりでなく，アンサンブルの内容を工夫して，即興演奏も行えるようにする。

本演習は，たまたま，集中講義で設定されたこともあり，その利点を活かし，上記の三つの目標を指導するため，4日間に四つの段階的ステップを計画した。すなわち，「アンサンブルへの導入」「アンサンブルの学習」「アンサンブルでの応用」および「アンサンブルの編曲」である。

以下のⅡ・Ⅲ章では，その実践指導について述べ，Ⅳ章では，その実践指導の経験を活かして，個人的な学習指導のまとめとしてのアンサンブル学習指導のあり方について，指導計画である四つの段階的ステップおよび指導内容の検討も含めて，まとめた。

Ⅱ．1993年度の「器楽演習」の実施内容

1．「器楽演習」の目的とねらい

「器楽演習」は，「器楽Ⅰ・Ⅱ」の後に応用力を養う授業の一環として，'93年度に初めて設置された。本演習は，「器楽Ⅰ・Ⅱ」が目指した応用部分の総まとめを，鍵盤楽器を中心とした器楽アンサンブルに規模を拡大して行うものである。初等教育に携わる指導者を養成する過程で，学生個人の音楽的能力を開発，育成すると同時に，他人や集団と音楽を共有できる力を高めておくことは大切であり，ピアノの進度差を壁としない教材や，指導者による適切な援助のもとで進める本演習は，重要な意義を持っている。

演習全体に渡って配慮したのは，学生が「器楽Ⅰ・Ⅱ」で得た達成感を壊さず，その上に，さらに音楽的表現に対する自信を重ねられるように心掛けたことである。学生の自信を背後から応援することは，音楽的自立を助けることでもあり，「器楽演習」の目的を達成するための大切なポイントであると思われる。したがって授業設計に当たっては，つぎの二つの観点に留意した。一つは，易から難への無理のない内容を徐々に発展させ，学生の余裕のある取組みの中で，学習意欲と興味が高揚するよう導いた。二つには，“与える指導”でなく“引き出す指導”を目指し，学生が自ら感じ，考え，工夫し，判断し，創造する，学生主体の音楽活動の場となるようにした。

本演習では「学生自身の力でピアノ楽譜をアンサンブル曲に編曲する。」ことを最終段階に置いているが，「器楽演習」の目的は，編曲の過程において，学生一人一人が異なる音楽性を持ちながらも意見をまとめ，構想を練り上げ，一つの形に結集させていく中で，大勢で共有し，共感して作り上げる体験の充実感を実感することであり，将来，教育の現場での実践において求められる力につながることを願うものである。

授業としては，15時限を四つの発展的な段階，すなわち，第一段階―アンサンブルへの導入，第二段階―アンサンブルの学習，第三段階―アンサンブルでの応用，第四段階―アンサンブルの編曲に配分した。その時間の経過や学習内容の展開については，表－1にまとめている。

次に各段階の指導の目的とねらいについて述べるが，その内容は，段階ごとに①～③に示した。

第一段階「アンサンブルへの導入」（表－1の1～4時限参照）

①学生の率直な感想や意見を本演習に役立てるために，「器楽Ⅰ・Ⅱ」についてのアンケートを参考にした。初回であるために生じた，本演習に対する学生の緊張を和らげ，期待が持てるように概要を説明した。

②導入を円滑にするため，「器楽Ⅰ・Ⅱ」の伴奏学習で用いた既習教材を歌うことから始め，鍵盤楽器，旋律打楽器，リズム楽器と慣れた楽器から順にメロディー奏，リズム奏をして，様々な楽器と出会わせ，まずは自由な音出しで即興的なアンサンブルを試みさせた。

③アンサンブルの仕方を学ぶにあたって，楽譜の指示に従って演奏する練習を，学生だけで自由に試みさせた。

第二段階「アンサンブルの学習」（表－1の5～8時限参照）

①編曲の一つの手本として，楽譜に従ってアンサンブルの基本的な事柄を実践しながら学ばせ，それぞれの楽器の担う音楽的役割を理解し，調和を計る学習をさせた。

②グループ相互に聴きあって学習することによって，自立的にグループでアンサンブルにまとめようとする姿勢を導き出した。

表1　1993年度「器楽演習」の指導計画と指導の実際（その1）

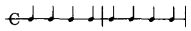
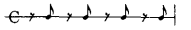
時限	指導計画							実際
	目的		教材				指導の方法	活動展開
	段階	ねらい	楽曲	楽譜の種類	楽器	その他		
1	アンサンブルへの導入（第一段階）	「器楽Ⅰ・Ⅱ」に対するアンケートをとり，学生の意見を本演習の参考にする。				アンケート用紙Ⅰ	◦アンケートをとる。 〔アンケートの内容〕 ・2年間の「器楽」学習の感想 ・印象に残った学習曲 ・好きな曲	
		本演習の概要を説明し，既習教材を歌って導入する。	アイアイ	歌唱伴奏譜			◦本演習の目的，日程，内容等を伝える。 ◦指導者によるピアノと電子オルガンの伴奏で斉唱させる。	
2		メロディーを担える楽器によるアンサンブルを体験する。	アイアイ	歌唱伴奏譜	ピアノ 電子オルガン 木琴		◦鍵盤楽器や木琴で，交替してメロディー奏をさせる。 ◦メロディー演奏者以外は，曲に合う手拍子を考えさせ，手拍子をしながら斉唱させる。 ◦互いのパートを聴きながら分奏，合奏をさせる。	◦手拍子の発表例 ㋑「しっぽのながい」の2小節にだけうつ。  ㋺曲を通して裏拍子をうつ。  ㋩曲を通してリズムパターンをくりかえしうつ。 
3		メロディーを担える楽器を体験し，鍵盤楽器とリズム楽器を用いて即興的にアンサンブルする。			リングスズ タンブリン カスタネット ウッドブロック トライアングル ジングルベル ビブラスラップ モンキータンブリン マラカス ギロ　など		◦リズム楽器の奏法および特徴を解説する。 ◦リズム楽器を自由に試奏させる。 ◦鍵盤楽器とリズム楽器の担当を分ける。	
			アイアイ	歌唱伴奏譜	ピアノ 電子オルガン 自選リズム楽器*㋑		◦鍵盤楽器の演奏に合わせ，学習曲にあうリズム楽器を選ばせて，即興的にリズムを打たせる。 ◦交替して演奏させる。	◦リズム楽器の即興演奏では音を出しているものの，音色に対して意識が弱くうっているリズム自体も，単調なくり返しが多かった。

表1　1993年度「器楽演習」の指導計画と指導の実際（その2）

時限	指導計画							実際
	目的		教材				指導の方法	活動展開
	段階	ねらい	楽曲	楽譜の種類	楽器	その他		
4	アンサンブルへの導入（第一段階）	リズム楽器パート譜付編曲楽譜によるアンサンブルの体験をする。	あわてんぼうのサンタクロース	リズム楽器パート譜付編曲楽譜（ロック系リズム）	ピアノ 電子オルガン 木琴 リズム楽器		◦グループ分け，選曲，曲に合う楽器の選択をさせ，楽器の担当者を決めさせる。	◦ジャンケンによって2グループに分かれ，それぞれのグループ名をつけさせた。 〔グループの演奏曲目〕 Aグループ〈あわてんぼうのサンタクロース〉 Bグループ〈とんでったバナナ〉
			とんでったバナナ	リズム楽器パート譜付編曲楽譜（ラテン系リズム）	ピアノ 電子オルガン 木琴 リズム楽器		◦グループ毎に自主的に練習させる。	◦鍵盤楽器は学習経験の多少にかかわらず，意欲的な学生が担当していた。
5・6	アンサンブルの学習（第二段階）	それぞれの楽器の担う，音楽的役割を理解し，調和をはかる学習をする。	チューリップ	リズム楽器パート譜付編曲楽譜（ラテン系リズム）	ピアノ 電子オルガン 木琴 鉄琴 リズム楽器		◦4時限で決めたグループにそれぞれ曲を与え，パート譜を見てリズム楽器を一つずつ重ね重奏させる。 ◦A，Bグループの順に演奏させ，他方のグループはそれぞれの楽器の役割とその調和に注意して聴くように促す。 ◦各グループ毎にメロディー楽器も加え，合奏させる。 ◦各々の楽器の役割を考えた音量やリズムのタイミングなどを工夫させる。	〔グループの演奏曲目〕 Aグループ〈チューリップ〉 Bグループ〈どんぐりころころ〉 〔使用リズム楽器例〕 ・ふる楽器 ── マラカス，スズ ・こする楽器 ― ギロ ・たたく楽器 ― ウッドブロック，カスタネット ◦鍵盤楽器，電子オルガンは，両手，足鍵盤を，各パートが有する役割（メロディー，リズム，ハーモニー）で分担し，数人で演奏することも可能なことを助言した。
			どんぐりころころ	リズム楽器パート譜付編曲楽譜（ラテン系リズム）	ピアノ 電子オルガン 木琴 鉄琴 リズム楽器			
7		5，6時限の学習を基礎としてグループでアンサンブルを工夫し，相互に発表しあう。	あわてんぼうのサンタクロース	リズム楽器パート譜付編曲楽譜（ロック系リズム）	ピアノ 電子オルガン 木琴 鉄琴 リズム楽器		◦4時限で自由練習した曲を（グループ毎に2室に分かれ）表現の工夫をしながら仕上げさせる。 ◦両グループとも発表をし，歌唱部分は歌い合わせる。 ◦仕上がりについて感想を発表させる。	〔使用リズム楽器例〕 〈あわてんぼうのサンタクロース〉 リングスズ，ジングルベル，ミニシンバル，トライアングル，ウッドブロック 〈とんでったバナナ〉 マラカス，ギロ，タンブリン，ビブラスラップ
			とんでったバナナ	リズム楽器パート譜付編曲楽譜（ラテン系リズム）	ピアノ 電子オルガン 木琴 鉄琴 リズム楽器			◦出だしや，リピートのタイミングをグループのメンバーで確認しあっていた。 ◦相互に述べ合った感想は，〈あわてんぼうサンタクロース〉はかわいい。 〈とんでったバナナ〉は上手。

表1　1993年度「器楽演習」の指導計画と指導の実際（その3）

時限	指導計画							実際
	目的		教材				指導の方法	活動展開
	段階	ねらい	楽曲	楽譜の種類	楽器	その他		
8	アンサンブルの学習（第二段階）	11時限の鍵盤楽器のみのアンサンブルや連弾のための楽譜の配布とパートナーの決定をする。 10時限のアンサンブルに参加できる楽器創作を宿題とする。	ゆりかごの歌 ぞうさん いぬのおまわりさん 河はよんでいる わらの中の七面鳥	ピアノ連弾譜 ピアノ連弾譜 ピアノ連弾譜 ピアノ，電子オルガンアンサンブル楽譜 ピアノ，電子オルガンアンサンブル楽譜			◦曲の難易度と学生の力量を考慮して，あらかじめ準備した連弾楽譜（歌唱教材をいろいろなリズムに編曲したものや，電子オルガンとのアンサンブル用のもの）を配布しパートナーを伝える。	
9	アンサンブルでの応用（第三段階）	アンサンブルに編曲する土台として楽曲を分析的にとらえる学習をする。	おもちゃの兵隊	ピアノ伴奏譜付メロディー譜			◦指導者によるピアノと電子オルガンの演奏を聴かせ，小節番号をつけさせる。 ◦「主旋律見つけ」をさせる。 ◦特徴的なリズムを手拍子でリズムうちさせる。 ◦曲全体の構成について質問し，複合三部形式であることを確認させる。	◦曲が長く，楽譜が比較的複雑であったため，理解しにくい学生もいた。そのため，興味を失いがちな学生にはメロディーのはじまる小節番号をたずねるなどして楽譜に注目するよう促した。
10		創作した楽器を用いてアンサンブルする。	 おもちゃの兵隊	 ピアノ伴奏譜付メロディー譜	創作楽器 創作楽器 自選リズム楽器	カメラ	◦8時限に課題とした創作楽器の試奏発表をさせる。 ◦9時限での楽曲構造についての学習経験を生かし指導者のピアノと電子オルガンの演奏に合わせて創作楽器（リズム楽器）を即興的にうたせる。	◦創作楽器の写真をとる。 〔創作楽器事例〕 ・ビンにスプーンをさし込み動かす。 ・波板をこする。 ・筒に砂を入れて振る。 ◦創作楽器は音量が小さく，学生たちはほとんど既製のリズム楽器を選択したため，指導者が創作楽器を用いて演奏に加わった。
11		鍵盤楽器によるアンサンブルの学習をする。	ゆりかごの歌 ぞうさん いぬのおまわりさん 河はよんでいる わらの中の七面鳥	ピアノ連弾譜 ピアノ連弾譜 ピアノ連弾譜 ピアノ，電子オルガンアンサンブル楽譜 ピアノ，電子オルガンアンサンブル楽譜	ピアノ ピアノ ピアノ ピアノ 電子オルガン ピアノ 電子オルガン		◦8時限に課題として練習してきた連弾曲を，出席者全員に交替で演奏させる。 ◦演奏者の演奏を歌唱教材とは異なる編曲に注意して鑑賞させる。	◦よく聴き合うことと同時に止まらないことを特に注意したため，前時限までと異なりかなり緊張した雰囲気だった。 ◦電子オルガンとピアノや，3人での演奏に興味をもって聴いていた。

表1　1993年度「器楽演習」の指導計画と指導の実際（その4）

時限	指導計画							実際
	目的		教材				指導の方法	活動展開
	段階	ねらい	楽曲	楽譜の種類	楽器	その他		
12・13・14・15	アンサンブルの編曲（第四段階）	ピアノ楽譜を器楽アンサンブルに編曲する。	①勇気りんりん ②となりのトトロ ③1時限でのアンケート「好きな曲」から1曲	ピアノ譜 ピアノ譜 ピアノ譜			◦指導者の用意したピアノ楽譜曲3曲の中から1曲ずつをABのグループ毎に選曲させ，楽器担当者を決めさせる。 ◦グループ毎に演奏内容，および曲全体の構成について話し合い決めさせる。	◦アンケートIで「好きな曲」に数人があげた〈ドナドナ〉を準備したが，学生は笑って選曲しなかった。 〔グループの演奏曲目〕 ・Aグループ〈勇気りんりん〉 ・Bグループ〈となりのトトロ〉
			①~③から Aグループの選択曲	ピアノ譜	ピアノ 電子オルガン 木琴 鉄琴 リズム楽器		◦グループ毎に討議，工夫しながら練習させる。	◦特定の楽器に片寄らず，なるべくいろいろな楽器にふれられるよう担当や楽器選びにアドバイスした。 ◦2室を用意し，集中して練習できるよう配慮した。
			①~③から Bグループの選択曲	ピアノ譜	ピアノ 電子オルガン 木琴 鉄琴 リズム楽器		◦各パートを巡視し，意見や計画をこわさないよう，また学習の成果を確認し演奏に反映させるように助言する。	◦曲想にあった音色をさがしてうったり，それぞれの音色が効果的に聴こえるよう考えていた。 ◦〈となりのトトロ〉では前奏と後奏をつくりだした。 ◦〈勇気りんりん〉では2コーラス目の工夫をこらした。 ◦rit, ∩などの表現があらわれた。 ◦リズム楽器担当の学生は，みんなで呼吸をあわせ，安定したリズム演奏をするためと，表現上のタイミングをそろえるために，一緒のステップをふみながら奏するという工夫を考え出した。 また並ぶ順番についても検討していた。
		発表をVTRに収録し，鑑賞して成果と問題点を考える。				ビデオ	◦グループ毎に発表させる。 ◦演奏をVTRに収録する。 ◦VTRを鑑賞させる。	◦互いの演奏に興味をもち，身をのり出して聴いていた。 ◦VTRを見て，拍手してよろこんだ。 〔使用リズム楽器〕 〈勇気りんりん〉マラカス，リングスズ，モンキータンブリン，ビブラスラップ 〈となりのトトロ〉リングスズ，モンキータンブリン
		アンケートをとり，本演習全体を省みる。				アンケート用紙II	◦アンケートをとる。 〔アンケートの内容〕 ・本演習の感想	

※①　学生が自分の興味や関心で選んだ個人選択のリズム楽器

③次時限との間のブランクを利用するため，また学生の継続的な学習姿勢と前向きな取組みを期待して，アンサンブルに参加できる楽器作りと鍵盤楽器のアンサンブルの練習を宿題とした。

第三段階「アンサンブルでの応用」（表－1の9～11時限参照）

①これまでに蓄えたアンサンブル力を補強するため，音楽の特徴や構造を理論的にとらえる学習をさせた。

②創作楽器を用いてアンサンブルに参加し，第二段階とは異なる楽器音の調和や広がりなどの特徴を聴きとり，アンサンブルの例を体験させた。

③既習教材を連弾に編曲した曲，またはピアノと電子オルガンに編曲した曲によって，これまでに出会ったことのない様々な編曲法や奏法を体験し，アンサンブルのスタイルを学習させた。

第四段階「アンサンブルの編曲」（表－1の12～15時限参照）

①これまでの体験を総合して，グループのメンバーで意見を持ち寄り，ピアノ楽譜を学生の感覚を活かした独自の器楽アンサンブルに編曲させた。

②成果と問題点を自分達で考えるために，演奏をVTRに収録し，鑑賞させた。

③本演習に対する学生の率直な意見や感想を聞いて，演習全体を省み，次回に活かせる内容を確認した。

2．教材について

1　教材選択の観点

学習活動を成立させるための教材選択にあたり考慮した点は次の二点である。

・学習経験の差から生じる能力の違いが，なるべくマイナスの影響を及ぼさない教材であること。

・学生一人一人の音楽的な内面が自由に表現できる，踏み台的な材料としての教材であること。

以上の二点を踏まえて具体的な教材である楽曲と楽譜，楽器について選択の観点を述べる。

◎楽曲と楽譜

「器楽Ⅰ・Ⅱ」で教材とした楽曲や，そのメロディーをもつ編曲作品などを中心に選曲した。また，比較的読譜に時間を要さない，学生によく知られている曲を加え，四つの学習の段階に応じたものを配置した（表－2）。

◎楽器

学生全員が経験した鍵盤楽器であるピアノと電子オルガンを中心とし，メロディーを担える楽器として旋律打楽器の木琴，鉄琴，ミュージックベルを加え，リズムを担える楽器として数種の打楽器（以下リズム楽器）を準備した（表－1の3時限教材の楽器）。これらの楽器は教育の現場で用いられることが多いため，学生が自由に触れたり，演奏に活用する経験の場を与えておきたいと考え提供したものである。

学習活動の中で実際に使用する楽器は学生の選択にゆだねた。特にリズム楽器群は，すべてが演奏目的の教材ではなく，活用の幅広い選択肢である。

2　四つの学習段階と教材の配置

ここでは学習段階ごとに，教材の特徴について述べる。

表2　1993年度学習段階別教材の配置と内容

学習の段階	楽曲			楽譜の種類	使用された楽器	既習している内容			
	曲名	調子	拍子			科目	学習の分野	楽譜の種類	使用楽器
アンサンブルへの導入段階	アイアイ	C：	4/4	歌唱伴奏譜	ピアノ，電子オルガン，木琴 リズム楽器数種	器楽Ⅱ	歌唱教材の伴奏	歌唱伴奏譜	ピアノ
アンサンブルの学習段階	チューリップ	C：	4/4	リズム楽器パート譜付編曲楽譜	ピアノ，電子オルガン マラカス，ギロ，スズ，カスタネット，ウッドブロック				
	どんぐりころころ	C：	2/4		ピアノ，電子オルガン マラカス，ギロ，スズ，カスタネット，ウッドブロック				
	あわてんぼうのサンタクロース	F：	4/4		ピアノ，電子オルガン ウッドブロック，ジングルベル，スズ，ミニシンバル，トライアングル	器楽Ⅱ	歌唱教材の伴奏	歌唱伴奏譜	ピアノ
	とんでったバナナ	C：	4/4		ピアノ，電子オルガン マラカス，ギロ，タンブリン，ビブラスラップ				
アンサンブルでの応用段階	おもちゃの兵隊	C：	2/4	ピアノ伴奏譜付メロディー譜	創作楽器，リズム楽器数種	器楽Ⅱ	リズム教材	ピアノ譜	ピアノ
	ゆりかご	F：	2/4	ピアノ連弾譜	ピアノ		歌唱教材の伴奏	ピアノ譜	ピアノ
	ぞうさん	F：	3/4						
	犬のおまわりさん	D：	4/4						
	わらの中の七面鳥	C：	4/4	ピアノ，電子オルガンアンサンブル楽譜	ピアノ，電子オルガン		リズム教材	ピアノ譜	ピアノ
	河はよんでいる	C：	3/4				電子オルガン教材	コードネーム付1段譜	電子オルガン
アンサンブルの編曲段階	勇気りんりん	C：	4/4	ピアノ譜	ピアノ，電子オルガン，木琴 マラカス，スズ，モンキータンブリン，ビブラスラップ				
	となりのトトロ	C：	4/4		ピアノ，電子オルガン，木琴，鉄琴，ミュージックベル スズ，モンキータンブリン，トライアングル，ウッドブロック				
	ドナドナ*	a：	2/4						

※1時限で実施したアンケートで，好きな曲の回答として数人があげたものである。
楽曲の選択肢に加えたが，学生は選択しなかった。

(1)「アンサンブルへの導入」段階の教材

〈アイアイ〉は学生のピアノ伴奏で全員が歌える，親しみのある曲である。使用楽譜は，歌のパートと，メロディーを奏さないピアノ伴奏のパートに分かれて記譜されているもので，いろいろな楽器への置き換えが考えやすいことや，特徴的なリズムパターンを繰り返す伴奏型がリズム楽器に転換しやすいことなどから，この段階の教材として用いた。

(2)「アンサンブルの学習」段階の教材

楽曲はロック系とラテン系に編曲されたもので，リズムの種類は，〈チューリップ〉はチャチャ，〈どんぐりころころ〉はビギン，〈あわてんぼうのサンタクロース〉はロック，〈とんでったバナナ〉はルンバである。これらは，オリジナルメロディーに伴奏としてリズム的な特徴を与えたもので，編曲の一つの方法を示している。また，パート譜付き楽譜を用いることとし，アンサンブル形態の楽譜の読譜や，調和をはかる演奏などの学習に備えた。

使用楽器について，楽譜では，メロディー楽器，ふる楽器，こする楽器，たたく楽器などと示されている。ここで，リズム楽器群の奏法による分類という視点を獲得し，特徴的なリズムの表現を工夫する過程で，楽器独自の価値に出会っていくものと考えた。つまり，楽器を活かして用いていく，教材の選択眼を養う段階ととらえた。

(3)「アンサンブルでの応用」段階の教材

〈おもちゃの兵隊〉は一部分のみをリズム教材として学習したが，ここでは楽譜から音楽の構造や特徴を読み取るための教材として曲全体を取り上げた。曲の成り立ちに対する理解が，器楽アンサンブルに編曲する際の演奏リズムの変化づけや，使用楽器の編成などを工夫する手がかりとなることを提案するものである。応用という意味では，リズム楽器を自分で創作してみる課題を与え，〈おもちゃの兵隊〉に合わせて即興演奏をさせた。

鍵盤楽器のみのアンサンブル曲はいずれも編曲作品であるが，メロディー自体が編曲されている点で，前段階と異なった教材である。また，ハーモニーを変化させるリハモニーゼーションによる編曲の例がこれに多く含まれている。応用段階の教材としては編曲のいろいろを体験することによって，アンサンブルの様々な可能性へ視野を広げることに留意した。

(4)「アンサンブルの編曲」段階の教材

楽曲は，テレビやビデオなどを通じて広く知られているアニメソングを用いた。これを「器楽Ⅰ・Ⅱ」で取り上げたことはないが，学生がそれぞれに自分なりの出会い方をしている曲として多様な可能性をもっており，個人のイメージや感性を表現しやすいのではないかと考え採用した。簡単なピアノ譜を用いたのも，学生の力によって音楽づくりを展開させるという学習の最終段階を考えたものである。

3　成果と問題点

教材を計画していく過程では，学習をスムーズに展開できる選択と配置が重要で，時限から時限，また一つの段階から次の段階へのつながりが，学習する者にとって自然な発展であることが望ましいと考えた。それは，学習の目的が，学習したことを活かせるようになるという意味からであり，教材は，その内容の消化のされ方が重大な意味を持つこととなった。つまり，教材を通して何を学ばせることができるのかという内容の検討（選択）と，実際の指導でどのようにかみ砕かせるのかという消化の順序（配置）に分けて，教材の在り方が反省されなければならないと考える。

まず内容の検討（選択）については，段階ごとに詳しく述べたように，いろいろな可能性から指導のねらいを支えるに十分であったと考える。また，実際の指導展開でいかに消化されたのか

（配置）については，指導法と深く関係し，教材のみでの考察は不可能である。

しかし，最後の時限で，本演習の感想を尋ねたアンケートの回答に，次のような成果と受け止められる内容が得られた。

学生f　“1日目[6]は各自好きなように，2日目は合奏の実感をもち，4日目はみんなで意見を出し合ってアレンジしたり，音を創っていく作業を楽しみ味わった。”

学生g　“和音，リズム，イントロの仕方など，個々にいろいろな意見を言い合って，みんな成長したなと思った。”

同じように，反省点や次回への課題についてもアンケートの回答に見いだすことができる。

学生h　“連弾は，練習時間が必要なのであまり良くない。”

学生i　“連弾は，またいつもの授業に戻った気がした。”

こうした回答から考えると，「アンサンブルでの応用」段階の教材については再検討が必要かと思われる。指導者側の，意味ある展開への思いが先走り，楽譜に従って正しく演奏することを求める教材を配置した結果であったが，学生にとっては，何が求められているのかという実際問題と結びついて，発展よりむしろ「器楽Ⅰ・Ⅱ」の授業へ後退したような印象を強くしたようである。応用という段階をとらえ直し，内容の選択が学生に与え得る経験の選択という視点で，教材を検討し直したい。

3．指導の要点と展開

本演習において指導者は，今までの学習成果を十分に利用し，学生たちが苦手意識を持たないで学習に取り組めるように，また，小手先の技術習得に陥らないで音楽の本質的なものを体感できるようにと心がけた。本項では，Ⅱ－1で述べた目的にそって無理なく無駄なく学習させるように計画し実践した授業内容を，実践の結果と共に二つの要点にそって述べる。

1　経験を土台とし，経験差にとらわれない学習

1・2回生を通して積み重ねてきた鍵盤楽器学習の経験を大いに利用させるべく，鍵盤楽器を学習の中心においた。特にピアノは学生たちにとって多かれ少なかれ親しみの持てる慣れた楽器となっている。そこでまず最初にピアノ，電子オルガンを用い，次に木琴，鉄琴，リズム楽器と順に楽器の種類を増やしていった（表－1の教材参照）。これによって気後れや動揺を回避することができ，非常にスムーズな導入を図ることができた。さらに既習教材を利用することにより，鍵盤楽器経験の活用と同様に，技術的にはもちろん，精神的にもより良い効果をもたらしたといえる。既習教材に関しては，前項で詳しく述べたが，まず〈アイアイ〉を利用して導入したあと，〈あわてんぼうのサンタクロース〉と〈とんでったバナナ〉では編曲された楽譜を用い，続く連弾でも2回生の時に練習した曲を様々な編曲の楽譜で演奏させた（表－2参照）。このように「知っている・できる」教材の変化や展開を体験させたことは，学生の興味を喚起し，学習意欲を高めたと考えられる。以下のアンケートの結果にも，学生たちが既習教材の編曲に興味を持ち，楽しんだことが表れている。

学生j　“連弾もとても楽しく編曲されていてよかった。”

学生k　“ぞうさんの編曲が変わっていて面白かった。”

学生l　“同じ曲が少し変えるだけで全く違った味になり，それぞれによかった。”

また，経験は大いに活かすが，経験が少ないことによって積極性を失ったり，結果的にできないからやる気がでないということにならないように，授業の組み立てを慎重に行った。まずはじめは，積極性のある希望者に複雑なパートをまかせ，音楽経験の少ない学生には無理強いをせず

リズムパート等を受け持たせた。次の段階ではグループを中心に活動させ（表－1の4～7時限），楽しみながら自分自身のできることとやりたいことを確認させた。次には，鍵盤楽器が苦手な学生も一度は鍵盤楽器アンサンブルに取り組んでもらおうと，2～4人で連弾をさせた。しかしこれにはかなり練習を要したようで，楽しくその場でアンサンブルに入っていける一連の学習活動の中で学習意欲をそぐ結果になったとも考えられ，この第三段階の連弾による学習は次年への課題となった。

2　音楽性の伸長を第一義に考えた学習

Ⅰ章で述べたが，本演習では，「…ができるようにする。」「…を指導する。」といった課題の達成や技術の習得ではなく，自ら考え，選び，創ることができる音楽的素地の育成を第一の目的としている。上手に演奏ができることも大切ではあるが，教育の現場に立ったときに応用の効く豊かな音楽性を一人一人に持ってもらいたい，ということが我々の総意である。そのために指導者は，やり方や答えを最初に提示しない，また，学生の考えを一方的に否定しないことを心がけた。2時限でのリズムづくり，3時限での楽器選択や即興リズム，4時限のグループでの楽器選び，10時限での即興リズムうち，12時限からの編曲の試み（以上表－1参照）などは，いずれもこの趣旨からとりいれた。授業の全体の構成に関して言えば，最終目的である「自立した音楽づくり」まで，徐々に音楽体験を深めながら，考え感じつづけるように方向づけている。

中でもメロディー，リズムなどの音楽の要素に関しては，偏りなく学習できるように考慮した。本項の最初に述べたが，鍵盤楽器学習の延長としてメロディーをマスターしたあとリズムに注目させ，後半では楽曲構造について調べながら考える時間を設けた（表－1の9時限）。残念ながらこの9時限の形式に関する学習では（題材に用いた曲が長すぎたこともあって），一部の学生は興味を失いがちであった。さらにハーモニーについては'93では充分に取り上げられず，これらの点については'94への反省となった。

その他に重視した点として，音楽の活動に関して特に配慮した事柄を上げておく。活動については，様々な体験ができるように，また同じ活動が続かないように配慮して計画をたてた（表－1参照）。また，アンサンブルにおいて大切な「合わせる」力を身につけるために，「聴く」活動を特に重視し，他グループの演奏を鑑賞するだけでなく自らの演奏時に常に耳を開いているように促し，音量のバランスや演奏のタイミングに注意して活動を展開させた。

これらの結果，最終段階である「アンサンブルの編曲」においては，それまでの場面場面では力を出し切れなかった学生も，規制されない十分な時間のなかで，お互いに影響しあって臆せず技術やアイデアを出すことができた。自主的に前奏や後奏をつくりだしたり，2コーラス目に変化をつけたり，リタルダンド，フェルマータを新しく決めタイミングを合わせる工夫をするなど，教師の側でも予期していない独自の発想が見られ，伸び伸びと音楽性を醸してくれた感があった（編曲の実際については，表－1の第四段階を参照のこと）。

Ⅲ．1994年度の「器楽演習」の実施内容

1．1993年度の反省に立っての「器楽演習」の目的とねらい

'93年度の「器楽演習」は，一部に反省点はあるものの，最終段階の編曲において学生が示してくれた創造的な活動によって，一応願い通りの成果が確認できた。互いの音楽性や意欲を触発しあって，予想以上の独創性が引き出され，それぞれに個性的な作品は，学生の大きな自信となっ

た。良いアンサンブルにしたいという共通の目標に向かって，全員の合意で意見が採用されるので，全力を尽くそうとする主体的な姿勢が強く出て，一人一人の得意分野も生かされた。欠席者の代役をこなす即応力を発揮したり，リーダーシップを取る学生もいて，“させられる学習”と“する学習”の違いを学生自身実感した。同時に，指導者自身も，主体的学習の可能性を学んだ。これらの成果は，下記のような本演習についての学生の感想に示されている。

学生m　“先生に強制されるのでなく，助けられながら，自分たちで作り上げたので，本当に楽しく感じられた。”

学生n　“編曲，パート編成，楽器編成など，自分たちでできた喜びが大きい。”

学生o　“一人一人がアイデアを持ち寄って一つの曲を作り上げ，素晴らしい曲になった。”

学生p　“初心者の人達の成長がすごいと思った。”

学生q　“私達にも，結構これだけの合奏ができるのだと思った。”

’94年度の「器楽演習」では，’93年度の反省に基づき，二つのことに留意して学習内容を検討し直した。一つは，本演習を「学生による鍵盤楽器の演奏を中心とした音楽体験の拡大」であると明確にとらえ，出席者全員が関われるよう，鍵盤楽器だけのアンサンブルに時間を多く配分した。二つには，前後の流れにつながりにくかった第三段階の内容をミュージックベルのアンサンブルに変えて，音楽を大勢で共有する体験を持つようにした。

本演習は，鍵盤楽器のアンサンブル，リズム楽器のアンサンブル，ミュージックベルのアンサンブルと進め，最終段階で，これらの体験を総合し，学生だけで，アンサンブルを作り上げるという計画で行った。演習全体に渡って配慮したのは，計画にとらわれない柔軟な対応で，可能な限り，学生主体の学習活動となるような援助を心がけたことである。それによって，三つの段階の積み上げの効果が期待どおり集約され，第四段階ではほとんど学生主体の創造の時間となった。学生の発揮した個々のバックグランドを含めた総体的な音楽能力は，最終段階においてはほとんど差がなく，潜在力を引き出す主体的学習の意義が示された。その時間の経過や学習内容の展開については，表－3にまとめている。

次に段階ごとの指導の目的について述べるが，’93年度と重複する内容は省いて，第二段階と第三段階の変更点に絞って述べる。

まず，第二段階「アンサンブルの学習」では，メロディー楽器の担当者が偏り，全員に均等な機会を提供できていなかった反省に立って，伴奏部分だけでなく，曲構成が把握しやすいメロディー奏の体験を十分にさせるために，メロディーを担える楽器のみのアンサンブルを補充した（表－3の6時限参照）。前回の応用段階で問題があった宿題（表－1の8時限参照）は，相手のある内容は準備がしにくく，第二段階と第四段階を発展的に繋ぐ内容としてうまく機能しなかったので，授業時間内で消化可能な内容に変更し，「メロディーを担える楽器のみのアンサンブル」に変更した。

第三段階「アンサンブルでの応用」（表－3の7～10時限参照）では，始めにミュージックベルのメロディー奏における担当者の音楽的役割を感得させ，メロディー全体と他楽器との調和のとれた奏法や表現を工夫させた。また演奏例をCDによって鑑賞させ，感じたことを自らの演奏に生かして，ミュージックベルのみの二重奏に取り組ませた。さらに自らの演奏を録音によって聴いた感想を基に，演奏者間で調整しあって音楽を構成させた。次にはメロディー奏の学習を基に，ハーモニー奏，リズム奏を体験させ，ミュージックベルのみのアンサンブルに組み立て，音楽の仕組みに対する意識を高めるよう導いた。最後に，旋律打楽器とのアンサンブルに発展させ，音楽的構造を理解しての音楽的表現をねらった音楽づくりをさせた。

表3　1994年度「器楽演習」の指導計画と指導の実際（その１）

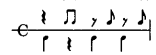
時限	指導計画							実際
	目的		教材				指導の方法	活動展開
	段階	ねらい	楽曲	楽譜の種類	楽器	その他		
1	アンサンブルへの導入（第一段階）	「器楽Ⅰ・Ⅱ」に対するアンケートをとり，学生の意見を本演習の参考にする。				アンケート用紙Ⅰ′	◦アンケートをとる。 〔アンケートの内容〕 ・器楽Ⅰ・Ⅱを振り返って ・現在好きな曲	
		本演習の概要を説明し，教材を歌って導入する。	クラリネットをこわしちゃった	歌唱伴奏譜	ピアノ 電子オルガン キーボード アコーディオン (S. A. T. B)※①		◦本授業の目的・日程・内容等を伝える。 ◦指導者によるピアノと電子オルガンの伴奏で斉唱させる。 ◦鍵盤楽器のみのアンサンブルをするために楽器を選び，担当を決めさせる。	◦各楽器が楽譜上で担えるパートと役割（メロディー，ハーモニー，リズム）を説明した。
2		メロディーを担える楽器によるアンサンブルを体験する。	クラリネットをこわしちゃった	歌唱伴奏譜	ピアノ 電子オルガン キーボード アコーディオン (S. A. T. B)		◦各パートで練習した後、全体奏させる。 ◦担当楽器を交替して演奏させる。	◦全員がアコーディオン演奏できるように配慮した。 ◦半音高い音をメロディーに重ねて〈クラリネットをこわしちゃった〉のイントロ部分の工夫をさせた。
			アイアイ	歌唱伴奏譜	ピアノ 電子オルガン キーボード アコーディオン (S. A. T. B) 木琴		◦２台の木琴を加えてハーモニーとしての演奏をさせる。	◦指導者は電子オルガンのリズムボックス※②やフィールイン※③を使用し，それぞれの曲の雰囲気を盛り上げた。 〔使用したリズムボックス〕 ・〈クラリネットをこわしちゃった〉はマーチ ・〈アイアイ〉はディスコサンバ ◦学生の参加人数が少なかったので授業展開が速く，リズミックな歌唱教材〈おもちゃのチャチャチャ〉を追加した。 ◦リズム楽器で曲の特徴的なリズム  を分奏させ，ラテンロックのリズムボックスに合わせてアンサンブルにまとめさせた。

表3　1994年度「器楽演習」の指導計画と指導の実際（その2）

時限	指導計画							実際
	目的		教材				指導の方法	活動展開
	段階	ねらい	楽曲	楽譜の種類	楽器	その他		
2								〔使用教材〕 ・歌唱伴奏譜 ・ピアノ，電子オルガン，キーボード，アコーディオン（S.A.T.B），鍵盤ハーモニカ，木琴
3	アンサンブルへの導入（第一段階）	リズムを担える楽器を体験し，鍵盤楽器とリズム楽器を用いて，即興的にアンサンブルをする。			リングスズ タンブリン カスタネット ウッドブロック トライアングル ビブラスラップ モンキータンブリン マラカス ギロ カバサ こきりこ　など		◦リズム楽器の奏法および特徴を解説する。 ◦リズム楽器を自由に試みさせる。	
			アイアイ	歌唱伴奏譜	自選リズム楽器 ピアノ 電子オルガン キーボード 木琴		◦指導者によるピアノと電子オルガンの演奏に合わせてリズム楽器を即興的に打たせる。 ◦人数を半分にして演奏させ，残り半分の学生は演奏を聴かせる。	◦ほとんどの学生は単調なリズムを打ち続けていた。
			クラリネットをこわしちゃった	歌唱伴奏譜	自選リズム楽器 ピアノ 電子オルガン キーボード 木琴			◦鍵盤楽器とリズム楽器に分かれて演奏させた。
4		リズム楽器パート譜付編曲楽譜によるアンサンブルの体験をする。	チューリップ	リズム楽器パート譜付編曲楽譜（ラテン系リズム）			◦グループに分け，選曲（指導者が事前に2曲ずつセットした楽曲）に合う楽器を選択させ，担当者を決めさせる。	◦ジャンケンによってグループに分かれた。それぞれグループ名をつけさせたが，学生はあまり興味を持たず，なかなか決まらなかった。
			どんぐりころころ	リズム楽器パート譜付編曲楽譜（ラテン系リズム）				

表3　1994年度「器楽演習」の指導計画と指導の実際（その3）

時限	指導計画							実際
	目的		教材				指導の方法	活動展開
	段階	ねらい	楽曲	楽譜の種類	楽器	その他		
4			とんでったバナナ	リズム楽器パート譜付編曲楽譜（ラテン系リズム）			◦グループ毎に自主的に練習させる。	〔グループの演奏曲目〕 Xグループ 〈チューリップ〉 〈とんでったバナナ〉 Yグループ 〈どんぐりころころ〉 〈あわてんぼうのサンタクロース〉
			あわてんぼうのサンタクロース	リズム楽器パート譜付編曲楽譜（ロック系リズム）				
5	アンサンブルの学習（第二段階）	それぞれの楽器の担う音楽的役割を理解し，調和をはかる学習をする。	チューリップ	リズム楽器パート譜付編曲楽譜（ラテン系リズム）	ピアノ 電子オルガン 鉄琴 リズム楽器		◦リズム楽器のパートを分奏し，リズム楽器を一つずつ重ねて重奏させる。 ◦他方のグループは，それぞれの楽器の役割とその調和に注意して聴くように促す。 ◦チャチャやビギンのリズムを黒板に書いたりリズムボックスを聞かせたりして，各々のリズムのイメージをつかませる。 ◦各グループ毎にメロディー楽器も加え，合奏させる。 ◦各々の楽器の役割を考えた音量や，リズムのタイミング等を工夫させる。	〔使用リズム楽器〕 〈チューリップ〉タンブリン，カスタネット，カバサ，リングスズ 〈どんぐりころころ〉小太鼓，マラカス，ギロ，モンキータンブリン 〈とんでったバナナ〉ウッドブロック，カナダ先住民族の太鼓，ギロ，マラカス 〈あわてんぼうのサンタクロース〉ウッドブロック，カバサ，タンブリン ◦学生は，最初リズム楽器にあまり関心を示さなかったが，リズム楽器の担う音楽的役割の重要性に次第に気付いていった。 ◦人数不足は，他のグループのメンバーが代役で補った。 ◦自分達で作るという前向きな姿勢で学生同志自由に意見を述べ合っていた。 ◦リズム楽器担当者は，歌いながら楽しんでステップを踏み，息を合わせる様子が見られた。 ◦人数が少なく，2グループが成立しなかったので，学生が自らの演奏を客観的に聴く機会を持つために，録音をして聴かせた。
			どんぐりころころ	リズム楽器パート譜付編曲楽譜（ラテン系リズム）	ピアノ 木琴 リズム楽器			
		グループでアンサンブルを工夫し，相互に発表しあう。	とんでったバナナ	リズム楽器パート譜付編曲楽譜（ラテン系リズム）	ピアノ 電子オルガン 木琴 鉄琴 リズム楽器			
			あわてんぼうのサンタクロース	リズム楽器パート譜付編曲楽譜（ロック系リズム）	ピアノ 木琴 鉄琴 リズム楽器			

表1　1993年度「器楽演習」の指導計画と指導の実際（その2）

時限	指導計画							実際
	目的		教材				指導の方法	活動展開
	段階	ねらい	楽曲	楽譜の種類	楽器	その他		
4	アンサンブルへの導入（第一段階）	リズム楽器パート譜付編曲楽譜によるアンサンブルの体験をする。	あわてんぼうのサンタクロース	リズム楽器パート譜付編曲楽譜（ロック系リズム）	ピアノ 電子オルガン 木琴 リズム楽器		◦グループ分け，選曲，曲に合う楽器の選択をさせ，楽器の担当者を決めさせる。	◦ジャンケンによって2グループに分かれ，それぞれのグループ名をつけさせた。 〔グループの演奏曲目〕 Aグループ〈あわてんぼうのサンタクロース〉 Bグループ〈とんでったバナナ〉
			とんでったバナナ	リズム楽器パート譜付編曲楽譜（ラテン系リズム）	ピアノ 電子オルガン 木琴 リズム楽器		◦グループ毎に自主的に練習させる。	◦鍵盤楽器は学習経験の多少にかかわらず，意欲的な学生が担当していた。
5・6	アンサンブルの学習（第二段階）	それぞれの楽器の担う，音楽的役割を理解し，調和をはかる学習をする。	チューリップ	リズム楽器パート譜付編曲楽譜（ラテン系リズム）	ピアノ 電子オルガン 木琴 鉄琴 リズム楽器		◦4時限で決めたグループにそれぞれ曲を与え，パート譜を見てリズム楽器を一つずつ重ね重奏させる。 ◦A，Bグループの順に演奏させ，他方のグループはそれぞれの楽器の役割とその調和に注意して聴くように促す。 ◦各グループ毎にメロディー楽器も加え，合奏させる。 ◦各々の楽器の役割を考えた音量やリズムのタイミングなどを工夫させる。	〔グループの演奏曲目〕 Aグループ〈チューリップ〉 Bグループ〈どんぐりころころ〉 〔使用リズム楽器例〕 ・ふる楽器 ── マラカス，スズ ・こする楽器 ― ギロ ・たたく楽器 ― ウッドブロック，カスタネット ◦鍵盤楽器，電子オルガンは，両手，足鍵盤を，各パートが有する役割（メロディー，リズム，ハーモニー）で分担し，数人で演奏することも可能なことを助言した。
			どんぐりころころ	リズム楽器パート譜付編曲楽譜（ラテン系リズム）	ピアノ 電子オルガン 木琴 鉄琴 リズム楽器			
7		5，6時限の学習を基礎としてグループでアンサンブルを工夫し，相互に発表しあう。	あわてんぼうのサンタクロース	リズム楽器パート譜付編曲楽譜（ロック系リズム）	ピアノ 電子オルガン 木琴 鉄琴 リズム楽器		◦4時限で自由練習した曲を（グループ毎に2室に分かれ）表現の工夫をしながら仕上げさせる。 ◦両グループとも発表をし，歌唱部分は歌い合わせる。 ◦仕上がりについて感想を発表させる。	〔使用リズム楽器例〕 〈あわてんぼうのサンタクロース〉 リングスズ，ジングルベル，ミニシンバル，トライアングル，ウッドブロック 〈とんでったバナナ〉 マラカス，ギロ，タンブリン，ビブラスラップ
			とんでったバナナ	リズム楽器パート譜付編曲楽譜（ラテン系リズム）	ピアノ 電子オルガン 木琴 鉄琴 リズム楽器			◦出だしや，リピートのタイミングをグループのメンバーで確認しあっていた。 ◦相互に述べ合った感想は，〈あわてんぼうサンタクロース〉はかわいい。 〈とんでったバナナ〉は上手。

表1　1993年度「器楽演習」の指導計画と指導の実際（その3）

時限	指導計画							実際
	目的		教材				指導の方法	活動展開
	段階	ねらい	楽曲	楽譜の種類	楽器	その他		
8	アンサンブルの学習（第二段階）	11時限の鍵盤楽器のみのアンサンブルや連弾のための楽譜の配布とパートナーの決定をする。 10時限のアンサンブルに参加できる楽器創作を宿題とする。	ゆりかごの歌 ぞうさん いぬのおまわりさん 河はよんでいる わらの中の七面鳥	ピアノ連弾譜 ピアノ連弾譜 ピアノ連弾譜 ピアノ，電子オルガンアンサンブル楽譜 ピアノ，電子オルガンアンサンブル楽譜			◦曲の難易度と学生の力量を考慮して，あらかじめ準備した連弾楽譜（歌唱教材をいろいろなリズムに編曲したものや，電子オルガンとのアンサンブル用のもの）を配布しパートナーを伝える。	
9	アンサンブルでの応用（第三段階）	アンサンブルに編曲する土台として楽曲を分析的にとらえる学習をする。	おもちゃの兵隊	ピアノ伴奏譜付メロディー譜			◦指導者によるピアノと電子オルガンの演奏を聴かせ，小節番号をつけさせる。 ◦「主旋律見つけ」をさせる。 ◦特徴的なリズムを手拍子でリズムうちさせる。 ◦曲全体の構成について質問し，複合三部形式であることを確認させる。	◦曲が長く，楽譜が比較的複雑であったため，理解しにくい学生もいた。そのため，興味を失いがちな学生にはメロディーのはじまる小節番号をたずねるなどして楽譜に注目するよう促した。
10		創作した楽器を用いてアンサンブルする。	 おもちゃの兵隊	 ピアノ伴奏譜付メロディー譜	創作楽器 創作楽器 自選リズム楽器	カメラ	◦8時限に課題とした創作楽器の試奏発表をさせる。 ◦9時限での楽曲構造についての学習経験を生かし指導者のピアノと電子オルガンの演奏に合わせて創作楽器（リズム楽器）を即興的にうたせる。	◦創作楽器の写真をとる。 〔創作楽器事例〕 ・ビンにスプーンをさし込み動かす。 ・波板をこする。 ・筒に砂を入れて振る。 ◦創作楽器は音量が小さく，学生たちはほとんど既製のリズム楽器を選択したため，指導者が創作楽器を用いて演奏に加わった。
11		鍵盤楽器によるアンサンブルの学習をする。	ゆりかごの歌 ぞうさん いぬのおまわりさん 河はよんでいる わらの中の七面鳥	ピアノ連弾譜 ピアノ連弾譜 ピアノ連弾譜 ピアノ，電子オルガンアンサンブル楽譜 ピアノ，電子オルガンアンサンブル楽譜	ピアノ ピアノ ピアノ ピアノ 電子オルガン ピアノ 電子オルガン		◦8時限に課題として練習してきた連弾曲を，出席者全員に交替で演奏させる。 ◦演奏者の演奏を歌唱教材とは異なる編曲に注意して鑑賞させる。	◦よく聴き合うことと同時に止まらないことを特に注意したため，前時限までと異なりかなり緊張した雰囲気だった。 ◦電子オルガンとピアノや，3人での演奏に興味をもって聴いていた。

表1　1993年度「器楽演習」の指導計画と指導の実際（その4）

時限	指導計画							実際
	目的		教材				指導の方法	活動展開
	段階	ねらい	楽曲	楽譜の種類	楽器	その他		
12・13・14・15	アンサンブルの編曲（第四段階）	ピアノ楽譜を器楽アンサンブルに編曲する。	①勇気りんりん ②となりのトトロ ③1時限でのアンケート「好きな曲」から1曲	ピアノ譜 ピアノ譜 ピアノ譜			◦指導者の用意したピアノ楽譜曲3曲の中から1曲ずつをABのグループ毎に選曲させ，楽器担当者を決めさせる。 ◦グループ毎に演奏内容，および曲全体の構成について話し合い決めさせる。	◦アンケートIで「好きな曲」に数人があげた〈ドナドナ〉を準備したが，学生は笑って選曲しなかった。 〔グループの演奏曲目〕 ・Aグループ〈勇気りんりん〉 ・Bグループ〈となりのトトロ〉
			①~③から Aグループの選択曲	ピアノ譜	ピアノ 電子オルガン 木琴 鉄琴 リズム楽器		◦グループ毎に討議，工夫しながら練習させる。	◦特定の楽器に片寄らず，なるべくいろいろな楽器にふれられるよう担当や楽器選びにアドバイスした。 ◦2室を用意し，集中して練習できるよう配慮した。
			①~③から Bグループの選択曲	ピアノ譜	ピアノ 電子オルガン 木琴 鉄琴 リズム楽器		◦各パートを巡視し，意見や計画をこわさないよう，また学習の成果を確認し演奏に反映させるように助言する。	◦曲想にあった音色をさがしてうったり，それぞれの音色が効果的に聴こえるよう考えていた。 ◦〈となりのトトロ〉では前奏と後奏をつくりだした。 ◦〈勇気りんりん〉では2コーラス目の工夫をこらした。 ◦rit, ∩などの表現があらわれた。 ◦リズム楽器担当の学生は，みんなで呼吸をあわせ，安定したリズム演奏をするためと，表現上のタイミングをそろえるために，一緒のステップをふみながら奏するという工夫を考え出した。 また並ぶ順番についても検討していた。
		発表をVTRに収録し，鑑賞して成果と問題点を考える。				ビデオ	◦グループ毎に発表させる。 ◦演奏をVTRに収録する。 ◦VTRを鑑賞させる。	◦互いの演奏に興味をもち，身をのり出して聴いていた。 ◦VTRを見て，拍手してよろこんだ。 〔使用リズム楽器〕 〈勇気りんりん〉マラカス，リングスズ，モンキータンブリン，ビブラスラップ 〈となりのトトロ〉リングスズ，モンキータンブリン
		アンケートをとり，本演習全体を省みる。				アンケート用紙II	◦アンケートをとる。 〔アンケートの内容〕 ・本演習の感想	

※①　学生が自分の興味や関心で選んだ個人選択のリズム楽器

表2　1993年度学習段階別教材の配置と内容

学習の段階	楽曲			楽譜の種類	使用された楽器	既習している内容			
	曲名	調子	拍子			科目	学習の分野	楽譜の種類	使用楽器
アンサンブルへの導入段階	アイアイ	C：	4/4	歌唱伴奏譜	ピアノ，電子オルガン，木琴 リズム楽器数種	器楽Ⅱ	歌唱教材の伴奏	歌唱伴奏譜	ピアノ
アンサンブルの学習段階	チューリップ	C：	4/4	リズム楽器パート譜付編曲楽譜	ピアノ，電子オルガン マラカス，ギロ，スズ，カスタネット，ウッドブロック				
	どんぐりころころ	C：	2/4		ピアノ，電子オルガン マラカス，ギロ，スズ，カスタネット，ウッドブロック				
	あわてんぼうのサンタクロース	F：	4/4		ピアノ，電子オルガン ウッドブロック，ジングルベル，スズ，ミニシンバル，トライアングル	器楽Ⅱ	歌唱教材の伴奏	歌唱伴奏譜	ピアノ
	とんでったバナナ	C：	4/4		ピアノ，電子オルガン マラカス，ギロ，タンブリン，ビブラスラップ				
アンサンブルでの応用段階	おもちゃの兵隊	C：	2/4	ピアノ伴奏譜付メロディー譜	創作楽器，リズム楽器数種	器楽Ⅱ	リズム教材	ピアノ譜	ピアノ
	ゆりかご	F：	2/4	ピアノ連弾譜	ピアノ		歌唱教材の伴奏	ピアノ譜	ピアノ
	ぞうさん	F：	3/4						
	犬のおまわりさん	D：	4/4						
	わらの中の七面鳥	C：	4/4	ピアノ，電子オルガンアンサンブル楽譜	ピアノ，電子オルガン		リズム教材	ピアノ譜	ピアノ
	河はよんでいる	C：	3/4				電子オルガン教材	コードネーム付1段譜	電子オルガン
アンサンブルの編曲段階	勇気りんりん	C：	4/4	ピアノ譜	ピアノ，電子オルガン，木琴 マラカス，スズ，モンキータンブリン，ビブラスラップ				
	となりのトトロ	C：	4/4		ピアノ，電子オルガン，木琴，鉄琴，ミュージックベル スズ，モンキータンブリン，トライアングル，ウッドブロック				
	ドナドナ*	a：	2/4						

※1時限で実施したアンケートで，好きな曲の回答として数人があげたものである。
楽曲の選択肢に加えたが，学生は選択しなかった。

表3　1994年度「器楽演習」の指導計画と指導の実際（その１）

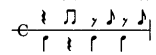
時限	指導計画							実際
	目的		教材				指導の方法	活動展開
	段階	ねらい	楽曲	楽譜の種類	楽器	その他		
1	アンサンブルへの導入（第一段階）	「器楽Ⅰ・Ⅱ」に対するアンケートをとり，学生の意見を本演習の参考にする。				アンケート用紙Ⅰ′	◦アンケートをとる。 〔アンケートの内容〕 ・器楽Ⅰ・Ⅱを振り返って ・現在好きな曲	
		本演習の概要を説明し，教材を歌って導入する。	クラリネットをこわしちゃった	歌唱伴奏譜	ピアノ 電子オルガン キーボード アコーディオン (S. A. T. B)※①		◦本授業の目的・日程・内容等を伝える。 ◦指導者によるピアノと電子オルガンの伴奏で斉唱させる。 ◦鍵盤楽器のみのアンサンブルをするために楽器を選び，担当を決めさせる。	◦各楽器が楽譜上で担えるパートと役割（メロディー，ハーモニー，リズム）を説明した。
2		メロディーを担える楽器によるアンサンブルを体験する。	クラリネットをこわしちゃった	歌唱伴奏譜	ピアノ 電子オルガン キーボード アコーディオン (S. A. T. B)		◦各パートで練習した後、全体奏させる。 ◦担当楽器を交替して演奏させる。	◦全員がアコーディオン演奏できるように配慮した。 ◦半音高い音をメロディーに重ねて〈クラリネットをこわしちゃった〉のイントロ部分の工夫をさせた。
			アイアイ	歌唱伴奏譜	ピアノ 電子オルガン キーボード アコーディオン (S. A. T. B) 木琴		◦２台の木琴を加えてハーモニーとしての演奏をさせる。	◦指導者は電子オルガンのリズムボックス※②やフィールイン※③を使用し，それぞれの曲の雰囲気を盛り上げた。 〔使用したリズムボックス〕 ・〈クラリネットをこわしちゃった〉はマーチ ・〈アイアイ〉はディスコサンバ ◦学生の参加人数が少なかったので授業展開が速く，リズミックな歌唱教材〈おもちゃのチャチャチャ〉を追加した。 ◦リズム楽器で曲の特徴的なリズム  を分奏させ，ラテンロックのリズムボックスに合わせてアンサンブルにまとめさせた。

表3　1994年度「器楽演習」の指導計画と指導の実際（その2）

時限	指導計画							実際
	目的		教材				指導の方法	活動展開
	段階	ねらい	楽曲	楽譜の種類	楽器	その他		
2								〔使用教材〕 ・歌唱伴奏譜 ・ピアノ，電子オルガン，キーボード，アコーディオン（S.A.T.B），鍵盤ハーモニカ，木琴
3	アンサンブルへの導入（第一段階）	リズムを担える楽器を体験し，鍵盤楽器とリズム楽器を用いて，即興的にアンサンブルをする。			リングスズ タンブリン カスタネット ウッドブロック トライアングル ビブラスラップ モンキータンブリン マラカス ギロ カバサ こきりこ　など		◦リズム楽器の奏法および特徴を解説する。 ◦リズム楽器を自由に試みさせる。	
			アイアイ	歌唱伴奏譜	自選リズム楽器 ピアノ 電子オルガン キーボード 木琴		◦指導者によるピアノと電子オルガンの演奏に合わせてリズム楽器を即興的に打たせる。 ◦人数を半分にして演奏させ，残り半分の学生は演奏を聴かせる。	◦ほとんどの学生は単調なリズムを打ち続けていた。
			クラリネットをこわしちゃった	歌唱伴奏譜	自選リズム楽器 ピアノ 電子オルガン キーボード 木琴			◦鍵盤楽器とリズム楽器に分かれて演奏させた。
4		リズム楽器パート譜付編曲楽譜によるアンサンブルの体験をする。	チューリップ	リズム楽器パート譜付編曲楽譜（ラテン系リズム）			◦グループに分け，選曲（指導者が事前に2曲ずつセットした楽曲）に合う楽器を選択させ，担当者を決めさせる。	◦ジャンケンによってグループに分かれた。それぞれグループ名をつけさせたが，学生はあまり興味を持たず，なかなか決まらなかった。
			どんぐりころころ	リズム楽器パート譜付編曲楽譜（ラテン系リズム）				

表3　1994年度「器楽演習」の指導計画と指導の実際（その4）

時限	指導計画							実際
	目的		教材				指導の方法	活動展開
	段階	ねらい	楽曲	楽譜の種類	楽器	その他		
6	アンサンブルの学習（第二段階）	メロディーを担える楽器のみのアンサンブルを学習する。	バスごっこ	リズム楽器パート譜付歌唱伴奏譜	自選リズム楽器 アコーディオン (S. A. T. B) 電子オルガン キーボード 木琴 鉄琴		◦指導者のピアノ伴奏で歌を歌わせる。 ◦曲中の𝄾のリズムを手拍子で打ちながら歌わせ，𝄾のリズムのバリエーションを考えさせる。 ◦リズム楽器で曲に合うリズムを打たせる。 ◦𝄾をリズム楽器で奏し，鍵盤楽器も加えてアンサンブルに仕上げさせる。 ◦楽器をメロディー群と伴奏群に分け，メロディー群には歌詞を意識した演奏をさせる。	〔リズムバリエーション発表例〕 𝄾 𝄽 𝄾 𝄾 𝄾 𝄾 𝄾 𝄾 𝄾 𝄾 〔使用リズム楽器〕 カナダ先住民族の太鼓，カバサ，木魚，ギロ，カスタネット，トライアングル，タンブリン ◦1番の歌詞に注目し，言葉のリズムを確認した上で，メロディー奏を工夫させた。 ◦楽譜の音符どおりにメロディーを奏した場合と，言葉のリズムにそって奏した場合の二とおりをテープに録音し，聴き比べをさせた。
7・8	アンサンブルでの応用（第三段階）	ミュージックベルを用いてメロディー奏を体験し，鍵盤打楽器とミュージックベルで重奏する。 ミュージックベルのCDを鑑賞して，参考にする。	エーデルワイス	二部合唱伴奏譜	ミュージックベル ミュージックベル 鉄琴 木琴	ミュージックベルについてのプリント CD	◦ミュージックベルの楽器と奏法についてプリントを配布して説明する。 ◦より良い音が出るように単打音の練習をさせる。 ◦学習曲の主旋律の構成音を確認させ，一人1音担当で演奏させる。 ◦同様に対旋律の12音を9人で分担し演奏させる（鉄琴が主旋律を受け持つ）。 ◦ミュージックベルのCDを鑑賞した後，主旋律をベル，対旋律を木琴と鉄琴で重奏させる。	◦楽譜に見入って，自分の担当している音の出番を待っているという感じであった。 ◦テンポを保つために，指導者が電子オルガンで3拍子のコード伴奏をつけ加えた。 ◦メロディーを心の中で歌いながら音楽の流れにのって音を出すように心がけさせた。
9		ミュージックベルのみの二重奏をする。 録音をし，鑑賞して成果と問題点を考える。	エーデルワイス	二部合唱伴奏譜	ミュージックベル2セット		◦電子オルガンで指導者が学習曲を演奏し表現上の注意点を確認させる。 ◦あらかじめ指導者間で決めておいた音の配分を知らせ，一人1～3音を受け持たせて，ベル2セットで二重奏をさせる。	◦8時限以上に音の精度を高めることを目標としたため，音と音のつながりをよく聴き合う努力をしはじめた。

表3　1994年度「器楽演習」の指導計画と指導の実際（その4）

時限	指導計画							実際
	目的		教材				指導の方法	活動展開
	段階	ねらい	楽曲	楽譜の種類	楽器	その他		
6	アンサンブルの学習（第二段階）	メロディーを担える楽器のみのアンサンブルを学習する。	バスごっこ	リズム楽器パート譜付歌唱伴奏譜	自選リズム楽器 アコーディオン (S. A. T. B) 電子オルガン キーボード 木琴 鉄琴		◦指導者のピアノ伴奏で歌を歌わせる。 ◦曲中の𝄾のリズムを手拍子で打ちながら歌わせ，𝄾のリズムのバリエーションを考えさせる。 ◦リズム楽器で曲に合うリズムを打たせる。 ◦𝄾をリズム楽器で奏し，鍵盤楽器も加えてアンサンブルに仕上げさせる。 ◦楽器をメロディー群と伴奏群に分け，メロディー群には歌詞を意識した演奏をさせる。	〔リズムバリエーション発表例〕 𝄾 𝄽 𝄾 𝄾 𝄾 𝄾 𝄾 𝄾 𝄾 𝄾 〔使用リズム楽器〕 カナダ先住民族の太鼓，カバサ，木魚，ギロ，カスタネット，トライアングル，タンブリン ◦1番の歌詞に注目し，言葉のリズムを確認した上で，メロディー奏を工夫させた。 ◦楽譜の音符どおりにメロディーを奏した場合と，言葉のリズムにそって奏した場合の二とおりをテープに録音し，聴き比べをさせた。
7・8	アンサンブルでの応用（第三段階）	ミュージックベルを用いてメロディー奏を体験し，鍵盤打楽器とミュージックベルで重奏する。 ミュージックベルのCDを鑑賞して，参考にする。	エーデルワイス	二部合唱伴奏譜	ミュージックベル ミュージックベル 鉄琴 木琴	ミュージックベルについてのプリント CD	◦ミュージックベルの楽器と奏法についてプリントを配布して説明する。 ◦より良い音が出るように単打音の練習をさせる。 ◦学習曲の主旋律の構成音を確認させ，一人1音担当で演奏させる。 ◦同様に対旋律の12音を9人で分担し演奏させる（鉄琴が主旋律を受け持つ）。 ◦ミュージックベルのCDを鑑賞した後，主旋律をベル，対旋律を木琴と鉄琴で重奏させる。	◦楽譜に見入って，自分の担当している音の出番を待っているという感じであった。 ◦テンポを保つために，指導者が電子オルガンで3拍子のコード伴奏をつけ加えた。 ◦メロディーを心の中で歌いながら音楽の流れにのって音を出すように心がけさせた。
9		ミュージックベルのみの二重奏をする。 録音をし，鑑賞して成果と問題点を考える。	エーデルワイス	二部合唱伴奏譜	ミュージックベル2セット		◦電子オルガンで指導者が学習曲を演奏し表現上の注意点を確認させる。 ◦あらかじめ指導者間で決めておいた音の配分を知らせ，一人1～3音を受け持たせて，ベル2セットで二重奏をさせる。	◦8時限以上に音の精度を高めることを目標としたため，音と音のつながりをよく聴き合う努力をしはじめた。

表3　1994年度「器楽演習」の指導計画と指導の実際（その5）

時限	指導計画							実際
	目的		教材				指導の方法	活動展開
	段階	ねらい	楽曲	楽譜の種類	楽器	その他		
9	アンサンブルでの応用（第三段階）							◦くり返し，そろうまで合わせ，部分練習をしながら仕上げた。 ◦音がそろうことに集中させ，演奏を録音して聴かせた。
10		7・8・9時限の学習を土台にして，ミュージックベルのみのハーモニー奏，リズム奏をし，鍵盤打楽器のメロディー奏，ハーモニー奏とアンサンブルをする。	バイエル97番	ピアノ譜	ミュージックベル 木琴 鉄琴		◦あらかじめ音の分担を決めておき，主旋律と対旋律を練習させる。 ◦ハーモニー奏における注意点（ひびきをよく聞き，タイミングを合わせる）を伝え，木琴，鉄琴を加えて合奏させる。	◦既習の曲であったため，音符にとらわれず演奏できた。 ◦全員がハーモニー奏とリズム奏が体験できるように配慮した。 ◦伴奏パートについては，テンポを一定に保つ役割を意識するように注意した。 ◦演奏を録音して聴かせた。
11	アンサンブルの編曲（第四段階）	ピアノ楽譜を器楽アンサンブルに編曲する。	①となりのトトロ ②勇気リンリン ③セーラームーン伝説 ①～③からの選択曲	ピアノ譜 ピアノ譜 ピアノ譜 ピアノ譜	 ピアノ譜 電子オルガン 木琴 鉄琴 ミュージックベル リズム楽器		◦指導者の用意したピアノ楽譜曲3曲の中から1曲を選曲させ，楽器，担当者を決めさせる。 ◦グループで，演奏内容，および曲全体の構成について話し合い決めさせる。 ◦討議し，工夫しながら練習させる。	◦学生の参加人数が少ないため最初のX，Yグループは一つになり〈となりのトトロ〉が選曲された。 ◦学生はメモを取りながら，楽譜中の構成を示す記号に従って演奏法に変化をつける工夫をした。
12・13・14・15		VTRに収録し，鑑賞して成果と問題点を考える。				VTR	◦各パートを巡視し，意見や計画をこわさないように，また学習の成果を確認し，演奏に反映させるように助言する。 ◦発表させ，演奏をVTRに収録する。 ◦VTRを鑑賞する。	◦学生は，電子オルガンのリズムボックスのいろいろなリズムに合わせて，その都度ふさわしい音色のリズム楽器に持ち変えることとし，各リズムのつなぎ方に工夫を凝らした。 ◦リズム楽器の持ち換えに必要な時間を確保し，しかも音楽的流れが自然であるように，学生同志で音合わせをしながら調整をした。 ◦学生が今までに経験したリズムを用いて編曲をした。

表3　1994年度「器楽演習」の指導計画と指導の実際（その6）

時限	指導計画							実際
	目的		教材				指導の方法	活動展開
	段階	ねらい	楽曲	楽譜の種類	楽器	その他		
12・13・14・15	アンサンブルの編曲（第四段階）							〔〈となりのトトロ〉の編曲例（曲の構成，使用リズム）と使用楽器〕 前奏　34～39小節 1コーラス　A※④　8ビート （ピアノ，電子オルガン，木琴，マラカス，カスタネット，トライアングル） 2コーラス　B　ルンバ （ピアノ，電子オルガン，木琴，カバサ，ウッドブロック，小太鼓，モンキータンブリン） 間奏　17～19小節（ピアノ，電子オルガン） （すてきなぼうけんはじまる） 3コーラス　B　ワルツ （ピアノ，電子オルガン，鉄琴，ミュージックベル） 間奏　17～19小節（ピアノ，電子オルガン） 4コーラス　B　タンゴ （ピアノ，電子オルガン，木琴，モンキータンブリン，カバサ，カスタネット） 5コーラス　A B　8ビート （ピアノ，電子オルガン，木琴，マラカス，カスタネット，トライアングル） 後奏　38，39小節
		アンケートをとり，本授業全体を省みる。				アンケート用紙 Ⅱ′	◦アンケートをとる 〔アンケートの内容〕 ・本授業の感想	

※①　Sはソプラノ，Aはアルト，Tはテノール，Bはバス
※②　楽曲に合わせて自動的にリズムセッションを奏する機能
※③　ここでは，リズムボックスに付随するリズムの挿入句
※④　Aは1～19小節
　　Bは20～38小節

2．教材について

1　教材見直しの観点

'93年度の問題点を踏まえ，次のように反省を具体化した。

・鍵盤楽器を中心とした学習活動を，教材楽器は，前年度通りの種類や数で成立させることができるか。

・鍵盤楽器の演奏を中心としたアンサンブルを，連弾というかたち以外で体験させ得る教材にはどのようなものがあげられるか。

・授業の展開の中で，「アンサンブルでの応用」段階をどうとらえ，どのような教材を配置すればよいか。

以上の三点を検討し，今年度，変更，追加した部分について述べる。

◎楽曲と楽譜

読譜面で無理の少ないことを考慮しながら，既習曲であるか否かにとらわれない選曲を行った。使用楽譜については，使用楽器とのかかわりで採用した。

◎楽器

鍵盤楽器のみのアンサンブルを可能にする準備として，アコーディオン4台（ソプラノ，アルト，テノール，バス，各1台），キーボード1台，鍵盤ハーモニカ1台を追加した。また，前回あまり活用されなかったミュージックベルを，集団でこそ演奏できる楽器として取り上げた。

2　四つの学習段階で変更，追加した教材の配置

ここでは変更，追加した教材の特徴について述べる。

(1)「アンサンブルへの導入」段階の教材

〈クラリネットをこわしちゃった〉の選曲理由はⅡ－2の2－(1) で述べた〈アイアイ〉と同様である。今年度は演習のねらいを，鍵盤楽器の演奏を中心に据えると明確にしたことを受けて，調性の異なる楽曲で経験を重ねるため追加した。

(2)「アンサンブルの学習」段階の教材

〈バスごっこ〉は，幼児や小学校低学年によく知られている曲で，教員採用試験の弾き歌いの課題にも登場したことから追加した。楽譜は，うた，メロディーを奏さないピアノ伴奏，木琴，鉄琴，たたくリズム楽器群に分かれたアンサンブル楽譜を使用し，この段階の他の教材曲と同質の学習内容を配置した。

(3)「アンサンブルでの応用」段階の教材

この段階のみ前回と全く異なる教材の選択，配置を行った。

ミュージックベルを選択した意図については，Ⅲ－3の3に述べる。

この段階に配置した意図であるが，学習を展開させるにあたり，学生に新鮮な興味や，新しい意欲を沸かせるような指導上の工夫も大切であることを認識したためである。これは，前回の連弾曲教材配置の反省に立ったものである。

楽曲は学生が好んで口ずさむ〈エーデルワイズ〉を選曲した。楽譜は二部合唱伴奏譜を用い，ミュージックベルは2セットを準備することで主旋律，対旋律のハーモニー形成の学習に備えた。〈バイエル97番〉は，メロディー奏，ハーモニー奏，リズム奏が同時に可能なミュージックベルの特徴をとらえる教材として選曲し，律動的に拍子感を持続する演奏上の工夫を体験する場とした。

表4　1994年度学習段階別教材の配置と内容

学習の段階	楽曲 曲名	調子	拍子	楽譜の種類	使用された楽器	既習している内容 科目	学習の分野	楽譜の種類	使用楽器
アンサンブルへの導入段階	クラリネットをこわしちゃった	F:	2/2	歌唱伴奏譜	ピアノ，電子オルガン，キーボード，アコーディオン（S.A.T.B） 木琴，リズム楽器数種	器楽Ⅱ	歌唱教材の伴奏	歌唱伴奏譜	ピアノ
	アイアイ	C:	4/4						
アンサンブルの学習段階	チューリップ	C:	4/4	リズム楽器パート譜付編曲楽譜	ピアノ，電子オルガン，鉄琴 タンブリン，カスタネット，カバサ，リングスズ				
	どんぐりころころ	C:	2/4		ピアノ，木琴 小太鼓，モンキータンブリン，ギロ，マラカス				
	あわてんぼうのサンタクロース	F:	4/4		ピアノ，木琴，鉄琴 ウッドブロック，カバサ	器楽Ⅱ	歌唱教材の伴奏	歌唱伴奏譜	ピアノ
	とんでったバナナ	C:	4/4		ピアノ，電子オルガン，木琴，鉄琴 ウッドブロック，カナダ先住民族の太鼓，ギロ，マラカス				
	バスごっこ	F:	4/4	リズム楽器パート譜付歌唱伴奏譜	アコーディオン（S.A.T.B），電子オルガン，キーボード 奄美八月踊りの太鼓，カナダ先住民族の太鼓，カバサ，木魚，ギロ カスタネット，トライアングル，タンブリン				
アンサンブルでの応用段階	エーデルワイス	C:	3/4	二部合唱伴奏譜	ミュージックベル（2セット） 鉄琴，木琴	音楽Ⅱ	歌唱	二部合唱伴奏譜	
	バイエル 97番	C:	3/8	ピアノ譜		器楽Ⅰ	基礎ピアノ	ピアノ譜	ピアノ
アンサンブルの編曲段階	勇気りんりん*	C:	4/4	ピアノ譜					
	となりのトトロ	C:	4/4		ピアノ，電子オルガン，モンキータンブリン，鉄琴，ミュージックベル 木琴，マラカス，カスタネット，トライアングル，カバサ，小太鼓 ウッドブロック				
	セーラームーン伝説*	a:	4/4						

□ は今年度新しく採用した楽曲である。
※　3曲の中から1曲を学生に選択させた結果，選ばれなかった曲である。

(4)「アンサンブルの編曲」段階の教材

〈セーラームーン伝説〉は現在放映中のテレビアニメ主題歌である。他の二曲の性格に準じ，選択肢に含めたものである。全教材曲の中で，ただ一曲の短調の楽曲である点は，前回の〈ドナドナ〉と同様である。

3　成果と問題点

各段階ごとに述べてきた追加，変更教材の選択と配置の意図は，実際の指導の中で，ねらいに沿った学習を成立させたものと考える。本演習の感想を尋ねたアンケートに次のような回答を得た。

学生ｒ　“みんながそろってはじめて一つの曲が仕上がるミュージックベルは気持ちよかった。”

学生ｓ　“ミュージックベルなど今まで触ったことのない楽器を演奏できて有意義な４日間だった。”

学生ｔ　“こんなに音楽自体を楽しんだのは久しぶりだ。”

学生ｕ　“最初は緊張したがピアノよりうまくできたので音楽に対する自信回復になった。”

学生ｖ　“タンブリン，カスタネットなど簡単な楽器ですごく楽しい音楽がつくれるのに感心した。”

学生ｗ　“タンブリン，カスタネット，スズなどはめずらしくなかったが合奏してみてカスタネットの役割の大きさに気づいた。”

学生ｚ　“こんなに一生懸命考えた授業はない。達成感や充実感を味わった。”

なお，今回のアンケートでは反省点や次回への課題を示唆するような内容の回答は見られなかった。これらを通して，教材の選択や配置を含む本授業の全体として，ある程度の成果をおさめたものと理解する。しかし，指導者側の自己評価においてはいくつかの問題点が明らかとなった。

一つには，歌詞のついたメロディーを楽器で演奏する際に，楽譜をどう読むかである。これは，Ⅲ－３の２に述べるが，教材としてもその点の扱いを今後検討したい。

二つ目に，ミュージックベルの利用について，指導の目的を達成できる利点のみに注目した選択になっていたことに気づいた。演奏に際しては，階名でうたえることが前提となるため，階名唱の簡単さからハ長調の楽曲を用いたのであった。しかし，実際には固定ド唱法と移動ド唱法という前提の相違が個人的レベルで存在している。この教材の体験を，すべての調性の楽曲演奏にむけて発展する糸口とするなら，そこへ導く指導性が求められるのである。指導上の問題点として，また教材研究の考察点としても，今後の課題に据えたいと考えている。

今回見いだした問題点を総合的にとらえると，教材自身の持つメリット，デメリットの両面を認識した上で，さらに用い方によって生じるメリット，デメリットについても見通しをもった選択の必要性が強調されている。活用とはそういった視野から生まれるものであると痛感した。これは私たち指導者の反省であると同時に，将来教員になる学生に持ち合わせてほしい観点でもある。今回の私たちの経験が，学生に還元されるべく，さらなる授業計画の充実にむけて検討を深めたい。

3．指導内容の変更点と展開

前年度の反省に基づき，'94年度には以下のような点を変更し，試みた。

1　鍵盤楽器の補充

前年度の学習における導入時に，それまで２年間学習してきた鍵盤楽器をまず用いたことは，非常に効果的だった。しかし，ほぼ初見の状態でピアノや電子オルガンを一人で演奏することができる学生は限られており，右手のみ，左手のみのように，分担して演奏させるなどの方法をとっ

ていた。そのため，最初から分奏のバスパートを受け持つような場合は特に，学生は音楽の全体像をつかみにくいようであった。そこで'94年度は，鍵盤楽器のなかでも比較的容易にメロディー奏ができ，小，中，高校での演奏経験もあると思われるアコーディオン4台（ソプラノ，アルト，テノール，バス）を新しく補充してこの問題に対処することにした（表－3の2時限）。アコーディオンによって全員が交代して既習のメロディーを復習したことで，一人一人楽曲全体の把握ができ，同時に演奏に対する自信が生まれ，前年度よりさらに有効な導入が可能になった。

2　歌唱教材の利用に関する指導

'94年度は，新しい試みとして，歌唱教材をアンサンブルに用いる際の注意点を確認し，問題意識をもって演奏を仕上げた（表－3の6時限）。すでに「器楽Ⅱ」の授業で，歌いやすい伴奏法として，歌詞である日本語のリズムを感得し，音の入りのタイミングをはかり，歌う人の呼吸に配慮する練習を積み重ねてきている。そこで'94年度は，「器楽Ⅱ」での学習に継続してアンサンブルにおいても，歌詞を良く吟味し日本語の特徴を把握した上で演奏する学習を加えた。ただこの学習は，音楽と言語の複雑な関係を含んでおり，この問題については今後指導者間でさらに研究し，続けて取り組んでいかなければならないと考えている。

3　ハーモニー学習の強化

Ⅱ－3でも述べたが，'93年度では，メロディーやリズムについてはそれぞれ重点的に取り組ませたが，ハーモニーに焦点を当てる機会は少なかった。そこで'94年度は，前年には選択楽器の一つだったミュージックベルを，ハーモニー学習のための利用を含めた重要な楽器として活用することにした（表－3の7時限以降）。ミュージックベルはメロディー，リズム，ハーモニー奏ができ，かつ，1音から2・3音までの音の担当で演奏に参加できる手軽さもある。またこの楽器は，皆で協力して音をつなぎ，音楽に仕上げるという点でアンサンブル学習に最適であると考えた。学生は最初「子供の楽器」という印象を持ったのか，少し遊び気分になったようにもみえたが，実際に良い音を出しそれをムラなくそろえ，合わせることの困難さに直面し，次第に熱中していった。特にハーモニー奏では，音のばらつきがあると騒音に聞こえてしまうため，お互いによく聞きあって精度を高め，注意深く演奏していた。

4　その他の変更点

前述したが，'93年度は，連弾の時間や形式の学習が一連のアンサンブル学習の流れのなかで停滞の原因となっていた。そこで'94年度では学習の流れに連続性をもたせるため，変更点として上述の1～3をとりいれた。これによって学生の学習意欲が持続し，楽しい雰囲気で授業を進めることができた。ただ，形式感を身につける学習を要所要所に組み込む予定であったが，それが達成できたかどうかは若干問題が残る。

最後にもう一点，聴く活動に大きな変更点があった。'94年度は受講者数が少なく，一つのグループで授業を進めたために他のグループの演奏を聴くことができず，聴く活動を保障する方法を講じなければならなくなった。そこで8時限で数曲の演奏例をCDで聞く時間を設けた。また，6・9・10時限にそれぞれ練習の成果である演奏を録音し，すぐ後にそれを鑑賞させた（表－3）。学生たちは非常に熱心に聴き感想を述べあっており，我々はフィールドバックしながら学習させる必要を痛感した。

以上のような新しいとり組みによって学生たちは終始積極的に活動を続け，最終段階である「アンサンブルの編曲」では音楽の流れを大切にして，互いにアドバイスし合いながら何度もやり直し，それまでの学習をこなした表現がなされていた。それによって，前年度とはまた違った

スケールの大きい，特にリズムや構成に工夫を凝らした作品を作り上げることができた（編曲の構成やリズムおよび使用楽器については，表－3の第四段階を参照のこと）。

なお，94年度から次年度への課題については，Ⅳ章にまとめて述べる。

Ⅳ．ま　と　め

1．「器楽演習」の目的とねらい

本演習では，導入，学習，応用，編曲という四つの学習段階を設定して授業の展開を行った。これは，基礎から計画的にアンサンブルの体験を積み，編曲という創造的活動にまで学生を引き上げるためのステップであった。

本演習の二度の担当から，授業設計の要点として次の二点が明らかになった。一つは，この過程を発展的にしかも効果的に機能させるには，前の経験が次の経験の土台として生きる内容を十分吟味すること，二つには，その学習内容を学生にとって生きた体験にするために，自立的な学習に導くことが大切であることである。'94年度は，'93年度に比べて「聴く学習」によって，学生の主体性がいっそう促進された印象を持った。“よく聴く”ことによって自ら気付き，発見し，創意工夫する力が生み出されて行った。ここでの指導者の役割は，こうした自立的活動のヒントや刺激となる，聴く場面を多様に提供することだと思われる。

例えば，学習段階から，意識的によく聴くことを奨励した。“自分の音と他人の音を聴く”，“互いに聴き合う”，“グループ相互に鑑賞し合う”など様々なレベルで注意深く聴いたことによって，アンサンブルに積極的に取り組む姿勢が養われた。応用段階では，'94年度にミュージックベルのアンサンブルを取り入れたが，第三段階に配した授業展開は，アンサンブルへの学生の興味を一段と盛り上げる効果があった。奏法で微妙に音色や音量が変わるデリケートな楽器ということもあって，“一つの音色に耳を澄まし”，より良い演奏を求めていく中で，アンサンブルの方法を学生自ら獲得して行った。集中して聴くことと学生相互の連帯感が要求されるので，アンサンブルを質的に高める良い学習になった。ミュージックベルは，応用段階の学習目的を果たすのに有効な楽器であったので，Ⅲの2の3で示した反省点を踏まえて，次回も活用させたい。“自分達の演奏を録音して聴く”ことは，反省点を即演奏に活かすことができた。また，“CDで模範演奏を聴く”ことは，学生の音楽的要求水準を高揚させることになった。この段階で，聴く力が養われると同時に，自分たちでつくりあげようとする主体性が現れた。この様に，主体的に聴くように導くことで，徐々に音楽的な自立が計られた事実から，「聴く学習」には，上記以外にも様々な局面からの効用が考えられる。目的に添った配置を含めて次への課題としたい。

2．教材の学習的価値と活用の方法

本演習の教材は，楽曲，使用楽譜，楽器の三つの柱で検討し，組み立ててきた。それは，学生に学ばせたい内容を与えてくれる，可能性の高い材料の配分であった。しかし，これらの材料の組み合わせが本当の意味で教材となるか，ならないか，それは，実際の指導での用い方次第である。指導者がどのように使用したか，また，学生の反応によっては，かみ砕いて提供する必要も生じるが，その場合にどんな方法で行ったかなど，実践記録から考察するべき点が見いだされる。

例えば電子オルガンの奏法について，実際の指導場面では，上鍵盤，下鍵盤，足鍵盤をそれぞれ独立した形で三人に弾かせることがあった（表－1の5，6時限の実際）。本来，電子オルガ

ンはこのような奏し方をしない。楽器にはそれぞれ楽器としての奏法があることを考えたとき，このような教材の用い方が，これも活用の範囲としてよいのか，そうではないのか，考察するべきではないだろうか。特に本演習のような体験を中心にした授業では，一層慎重な配慮が求められると考える。こうしたさまざまな危険性を認識することから，これからの指導の方法や在り方を探って行きたい。

3．指導法についての展望

指導法に関しては，'94年度の反省としてすでに，歌唱教材をアンサンブルに用いる際の問題と，形式に関する内容をいかに抵抗無く学習させるかという点を問題提起した。これらの問題点については，今後十分に話し合って改善してゆきたいと思う。

その他に，即興表現のとらえ方について考えるべき点があった。'93年度，'94年度共，学習内容を指導者の側から一方的に指示することを避け，「即興で…」という場面を多く設定した（表－1，表－3）。しかし，学生たちがどのように即興表現をしたかを取り上げる機会は少なく，今後は'93年度2時限のリズム打ち（表－1）のように，即興表現の例を皆で取り上げ検討することも考えたい。

本演習は短期間（集中講義）であったため，指導者にとって学生たちの成長は手に取るようによく分かった。最初は単調でまとまりのない演奏であったが，数日後に彼らは創意工夫した独自の編曲作品を作り上げ，演奏においても格段の進歩を見せた。その間には，音自体や，音と音の組み合わせ，タイミングに注目していく過程があった（表－1，表－3の活動展開を参照）。指導者は指導計画を実施して行きながら，個々の学生が異なる興味をもち，異なる時期に伸びていくのを見るにつけ，アンサンブルの土台として，学生一人一人の成長できる十分な時間が必要であると感じた。例えば，木琴，鉄琴，アコーディオンなどの，ピアノと奏法の異なる旋律楽器を手にしたときに，多くの自習時間（期間）を持つことができれば，学生は試行錯誤しながら学習内容の理解を深め，より納得できる演奏を目指すこともできる。

このような集中講義の問題点も含めて，Ⅰ－2で述べた「演奏力」と「表現力」の育成についてその方法を再検討し，さらに有意義な指導法について模索してゆく考えである。

4．「器楽Ⅰ・Ⅱ」に続く授業「器楽演習」のあり方

「器楽演習」は，「器楽Ⅰ・Ⅱ」に続く表現力や演奏力を育てる授業として設置したが，「器楽Ⅰ・Ⅱ」のみならず，他の音楽の授業「音楽Ⅰ・Ⅱ」[7]での学習内容（楽典・旋律と和音伴奏・楽式・伴奏法・編曲法など）や既習教材を実践に役立てるという計画も盛り込むことができたため，3学年以降に設置されている保育内容の教材研究の学習に先立つ音楽学習の基礎の総合的学習として，非常に有効であったと思われる。

このことについては，本章1～3の前向きな反省と次回への課題の提示にも示されている。

「器楽演習」の指導目標は「アンサンブル力を育てる指導」という目的で，四つの段階，すなわち，「アンサンブルへの導入」「アンサンブルの学習」「アンサンブルでの応用」および「アンサンブルの編曲」を設定したが，この計画は，多分に，集中講義での指導ということで，その利点を充分に活かして組み立てられ，また，指導の展開においても，そのことは充分に意識された。

しかし，この計画を半年の15回の授業という形で設定するとすれば，実技的内容のこきざみな学習ということで，集中性や連続性という点ではマイナスでも，アンサンブル学習という授業外

での予習や復習が困難な授業では，一般の授業展開での前回の復習の上に次の内容の学習を積み重ねることができるという点では，メリットも多いと考えられる。

もし，15回の授業で指導する場合には，四つの段階および時限の運営については，再検討の必要があろう。

おわりに

本演習は，新しい試みとして臨時に設置されたが，その学生にとっての有効性を考えると，臨時ではなくカリキュラムに位置づけられることが望まれる。とかく，授業は，積み重ねを考えてカリキュラムに設置されても，授業担当者間の打ち合わせがなければ，関連のある内容でもバラバラに行われることが多い。授業を縦横のつながりを考えたものとして行うことは，音楽のような実技を伴う内容の学習には，大いに求められることであろう。

こうした「器楽演習」のような授業を，他の関連授業との指導内容を考慮した上で，さらに，その指導者間の連絡も密にした上で，カリキュラムの中に恒常的に設置できれば，学生の表現力や演奏力の育成には，有効と思われる。

注

1) 梁島章子，山崎和子，岡本奈智子，坂井康子『初等教員養成のピアノ指導についての研究』京都教育大学紀要第75号A，1989，p.59～84

2) 「器楽Ⅰ」は第1学年に，「器楽Ⅱ」は第2学年に設置されている。詳しい指導法については，注1)，注3)を参照して欲しい。

3) 梁島章子，山崎和子，坂井康子，松井明恵『初等教員養成のピアノ指導についての研究（2）—基礎と応用—』京都教育大学紀要第83号A，1993，p.31～52

4) 「器楽演習」の授業には，山崎，坂井，松井があたったが，梁島は，音楽関係の授業をまとめる責任上，本研究に参加している。研究は4人の共同研究であるが，執筆は分担して行った。各項の執筆分担および文責は，Ⅰ，Ⅳ－4は梁島，Ⅱ－1，Ⅲ－1，Ⅳ－1は山崎，Ⅱ－2，Ⅲ－2，Ⅳ－2は松井，Ⅱ－3，Ⅲ－3，Ⅳ－3は坂井である。なお，表－1，表－3の作成は全員で行い，表－2，表－4の作成は松井が行った。

5) 本研究は，注1)および3)の論文に続く，『研究（3）』にあたるものである。

6) これは，この授業が集中講義として行われたため，このような表現になっている。

7) 詳しくは，注1)，注3)参照。